

茶路川筋の アイヌ語地名

第8回

○ピラウンナイ(川)

国道392号を北上し、上茶路の石井牧場を過ぎた所から続く坂を下って右へカーブすると、茶路川は大きく左へ曲がっていきます。その先で茶路川に流れ込んでいる川が「ピラウンナイ川」です。「ピラ(崖)・ウン(ある)・ナイ(沢)」のとおり、川に沿って崖が続いているところから、その名が付けました。

○ポンピラウンナイ(川)

「ポンピラウンナイ川」は、ピラウンナイ川に流れる川で、「ポン(小さい)」という言葉から「小さなピラウンナイ」と訳されますが、崖は大規模なものが見られるとのことです。ここで「ポン」が表しているのは、「ピラ」ではなくピラウンナイという川のこと、この川が支流であることを意味しています。



道東林道とタウンペツ川の交点

○タウンペツ(川)

「タウンペツ」は、ピラウンナイからさらに茶路川を北上し、美恵橋の手前で北西の方向から注いでいます。通称「トンベの沢」と呼ばれています。「ト(沼)、ウン(ある)、ペツ(川)」という意味ですが、今は、沼もその痕跡も見つけることはできません。

●トンベ遺跡

美恵橋の付近は、大正時代に刀や動物の骨が出土し、住居跡のようなくぼみがあったという話から「トンベ遺跡」として登録されています。

遺跡は、アイヌ時代のものと考えられ、かつて「トンベ骨塚」と呼ばれていました。昭和40年代に町内の遺跡調査に携わった富水慶一氏は「鹿の骨塚を形成していた」というと記録しています。

シカの骨塚については、胆振管内厚真町での発掘調査で、意図的に置かれたたぐさんのシカの骨が見つかっており、アイヌ民族の送り儀礼として、熊送りの「イヨマシテ」のように、シカも送りの対象になっていたことがわかりました。ただ、「トンベ遺跡」がそうであったかは、確認することができません。

(参考)北海道博物館協会ホームページ『集まれ！北海道の学芸員』)

●「ナイ」と「ペツ」

一般的には「ナイ」は「沢」、「ペツ」は「川」と訳しますが、「ナイ」を「小さな川」「流れが穏やかな洪水をあまり起こさない川」、「ペツ」を「大きな川」

「魚の豊富な川」「洪水をよく起こす川」と訳している文献もあります。

アイヌ語地名研究家の山田秀三は、北海道のアイヌ語地名の約三分の一が「ペツ」と「ナイ」のつく地名だとして「アイヌ時代には、川は、大切な食糧である魚を獲る場所だった。また海に出るのにも、山に狩猟に行くのにも、あるいは植物食糧の山菜を採集に行くのにも川が利用された。川が、食べていくための最も大切な処であったから、それが地名に多く使われていたのであろう。」と述べています。

(参考)『アイヌ語地名の研究 第一巻』)

